

ヘンリー・デイヴィッド・ソローとアメリカ精神

—Autumnal Tints の場合—

西田 梨紗

序論

1862年に出版された *October, OR Autumnal Tints*¹⁾ (以下、*Autumnal Tints* と記す) は、ヘンリー・デイヴィッド・ソロー (Henry David Thoreau, 1817-1862) の晩年に執筆された作品である。スナイダーは *Henry David Thoreau* (1987) で *Autumnal Tints* に関する詳しい説明を行っており、ここでの指摘は先行論でふれられてきた内容をほとんどカバーしている。スナイダーはソローが作品で主張するように²⁾、*Autumnal Tints* は紅葉の一覧表のようなもので、10月に色付いた植物が描かれている以前から予定された本の一部だと指摘する。そのうえで、実的説明 (“factual”) と詩的説明 (“poetic”) を結び付けた風景画のように描写を纏めあげる手法、ソローが死を紅葉に重ね合わせて言及を行っている部分に着目している (Schneider 119-120)。

先行研究でいまだ研究されていない *Autumnal Tints* の着目点があるとなれば、作品冒頭に引用されたイギリス詩人ジェイムズ・トムソン³⁾ (James Thomson, 1700-1748) の *Autumn*⁴⁾ (1730) に留意した言及や、作品に織り込まれた植物を重要な象徴と定めた読み方である。そこで本論では、まず、ソローが作品の冒頭で *Autumn* から 950-954 行目を引用した意図を探る。次に、19世紀中頃において、社会で主流と見做された自然観とソローの自然観の相違を検証する。当時の社会でのソローの自然に対する価値観の特異性を述べたうえで、作品に織り込まれた植物群が饒舌な説明に代わって、ソローの思想を読者に伝えるはたらきをもつことを示す。最後に、ソローの場所の感覚に着目したあとで、ソローがこの作品を通して読者や講演時の聴衆

にアメリカへ関心が向かうよう促しているのではないかという問いを明らかにしていきたい。

1. *The Seasons* と *Autumnal Tints*

Autumnal Tints の冒頭部ではヨーロッパの秋とアメリカの秋が対比的に示されている。ここではアメリカで見られるような紅葉がヨーロッパにはないと指摘され (61)、そのあとすぐにトムソンの *Autumn* から 950-954 行目が引用されている。

But see the fading many-colored woods,
Shade deepening over shade, the country round
Imbrow; a crowded umbrage, dusk and dun,
Of every hue, from wan declining green
To sooty dark. (182)

ソローが主張するように、*Autumnal Tints* はアメリカの秋の色合いを書き留めた単なる植物の一覧表 (63-64) であれば、ヨーロッパの秋とアメリカの秋の対比を冒頭で提示し、続けてトムソンの詩を引用したのはなぜなのかという疑問がわく。

この疑問を解決する糸口として、アメリカにおける *The Seasons* の受容を概観したい。*The Seasons* のアメリカでの受容を概観する前に、イギリスでのこの詩の受容について簡単にふれる。スティーブソンによると、18世紀のイギリスでは *The Seasons* が大ヒットしていたという。今世紀のハリー・ポッターシリーズ、19世紀のウォルター・スコット (Sir Walter Scott, 1771-1832) の詩に並び、18世紀にはトムソンの *The Seasons* が大ヒットしていた (Stevenson 121)。イギリスで高い人気をもつ *The Seasons* は、家庭やサロンにも置かれていた馴染みのある詩であった。また、19世紀には教育の場でもこの詩は用いられ、子どもたちの読み書き能力を向上させる媒

体としてはたらいた (Jung 197-198)。

それでは、ユングによる *James Thomson's The Seasons, Print Culture, and Visual Interpretation, 1730-1842* (2015) を参照し、アメリカでいつ頃から *The Seasons* が流通していたのかを明らかにしていきたい (Jung 221-222)。ユングによると、アメリカで *The Seasons* がはじめて刊行した時期はわかっていない。1760 年中頃にはトムソンの口絵の付いた版がアメリカで流通していたと考えられるものの、アメリカで出版されたという証拠やイギリスから輸入されたという証拠がない (Jung 222)。しかし、イギリスから輸入された版の広告によって、1790 年から 19 世紀初頭にかけてアメリカで *The Seasons* が流通していたのは確かだという (Jung 222)。1788 年にはジョンソンの “Life” が合冊されている *Four Seasons* がブリチャード・ホールから出版され、\$ 3.09 で売られていた (Jung 222)。1790 年頃 (この版に出版年の記述はない) にマイコール (John Mycall) によって出版された版には “First the American Edition” と記されている (Jung 222)。1796 年にはフィラデルフィアでイラストの付いた版が出版された (Jung 222)。ユングによるこの著を参照すると、アメリカでは独立戦争がはじまる以前に、すでにトムソンの作品がすでに流通しており、1700 年代の終わりには *The Seasons* のいくつかの異なる版が出版されていたとわかる。

続いて、19 世紀アメリカでの *The Seasons* の受容を問題にする。ユングは 1800 年から 1810 年にかけて、ほぼ毎年、新しい版が一つは出版されていたと述べており、著書に挿入された版画は広く普及していた木版画ではなく、より高価な銅版画が挿入されていたとも説明している (Jung 227)。ユングの著書に加え、当時の発行物を精査した結果、19 世紀中頃に刊行された新聞から、*The Seasons* に関する記事がいくつか見つかった。たとえば、1843 年 11 月 11 日の *Boon's Lick Times* には、*The Seasons* を題材とした銅版に関する記事が掲載されている。ソローが *Autumnal Tints* の講演を行った前年、1858 年 7 月 3 日の *Alexandria Gazette* には *Summer* (1727) から 432-436 行目が引用されている。ユングの説明に加え、これらの記事から判断すると、*The Seasons* は長期間にわたってアメリカで人気を博し、ソローが属した時代においても人びとから親しまれていたといえる。

次の段階として、なぜ、ソローがアメリカの秋を書き留めた作品の冒頭部に、イギリス詩人が秋を描いた詩を引用したのかを考えていきたい。予想できるのでは、ソローが *Autumnal Tints* の冒頭で述べた主張 (“There is no account of such a phenomenon in English poetry, because the trees acquire but few bright colors there.”, 64) を根拠付けるためではないかということだ。周知のとおり、ソローはアメリカから出たことはなく、ヨーロッパ（イギリス）の秋を実際に見ていない。ソローが作品冒頭部でアメリカの秋とイギリスの秋を対置させた理由は、アメリカの秋の優位性、言い換えればアメリカの優位性を示すことにこそあると考えられる。

ソローが引用した *Autumn* の 950-954 行目を中心にこの詩全体を概観した結果、*Autumn* に用いられている色の数はごく僅かだとわかる。まず、ソローが引用した 950-954 行目に着目する。“the fading many-colored woods”、“wan declining green”、“To sooty dark” と描写されているよう、トムソンは紅葉の鮮やかな時期が過ぎ去り、晩秋へと向かう様子を描いている。さらに、*Autumn* 全体を概観すると、詩全体を通じて限られた複数の色が織り込まれているにすぎないと気付く。この詩のなかに織り込まれた色とは、“while broad, and brown, below,” (145)、“By Fits effulgent gilds th’ illumin’d Field,” (146)、“A glossy Shower, and of an ardent Brown,” (168)、“Where *Autumn* basks, with Fruit empurpled deep,” (170)、“When *Autumn*’s yellow Luster gilds the World,” (199) などである。このように *Autumn* にはところどころに色が織り込まれているが、その色とは黄ならびに赤がほとんどだ。

一方、ソローは *Autumnal Tints* というタイトルに相応しく、アメリカの秋にみられる豊富な色を作品に次々と書き留める。ディルマンが *Autumnal Tints* の特徴を “The essay itself is a poetic, imagistic account of the movement and types of New England fall foliage that stress the dynamics of the fall color changes.” (Dillman xx) と指摘するように、この作品はニューイングランドの秋の色合いが活写されている。あわせて着目すべき点は、*Autumn* を意識するかのようにアメリカの秋は小麦が象徴する黄色に限定されない豊富な色があると記述されているところだ。

For beautiful variety no crop can be compared with this. Here is not merely the plain yellow of the grains, but nearly all the colors that we know, the brightest blue not excepted. (88)

トムソンは *Autumn* の大部分を用いて、小麦畑ではたらく人びとの姿を描いており、この詩の大部分を黄色が印象付けている。*Autumn* のこのような特徴を踏まえると、ソローが *Autumn* の大部分を占める小麦の描写を意識したうえで、“Here is not merely the plain yellow of the grains” と述べたのではないかと考えられる。ソローはニューイングランドには豊富な秋の色合いがあることを熟知しており、Purple Grasses の紫 (62-67)、Red Maple の赤 (72-79)、Elm の黄 (79-80)、紅葉をむかえる前の緑の葉 (68) などといった秋に色づく植物を作品に次々と織り込む。ソローはニューイングランドの秋の色の豊富さを “Our paint-box is very imperfectly filled. Instead of, or beside, supplying such paint boxes as we do, we might supply these natural colors to the young.” (93) と表現ゆたかに書き留める。

ここまでにわたって、*Autumnal Tints* と *Autumn* を色彩の観点から比較考察してきた。両作品に織り込まれた色合いを比較すると、ソローが作品で *Autumn* を引用した理由は、イギリスの秋の色合いとアメリカの秋の色合いを対比的に示して、アメリカの秋の優位性を提示するためだといえよう。

2. 象徴としての植物

まるで植物の一覧表のように、秋の植物が次々と織り込まれた *Autumnal Tints* であるが、そこに織り込まれた植物群は正しい属性だけが描写されているのではない。これらの植物はソローの主観的な見解が投影されているばかりではなく、自らの共感者として描かれている。そこで、これらの植物が作品の解釈を助ける象徴としてはたらく役割をみていきたい。ここで、ソローが作品の冒頭で、アメリカで書かれた詩における秋の描かれ方について、“The autumnal change of our woods has not made a deep impression

on our own literature yet, October has hardly tinged our poetry.” (61) と主張している箇所に戻り、なぜ、ソローがこのような述べたのか、その答えを導き出す手がかりは、*Autumnal Tints* に織り込まれた生理学者 (physiologist) による自然の見解にある。

Generally, every fruit, on ripening, and just before it falls, when it commences a more independent and individual existence, requiring less nourishment from any source, and that not so much from the earth through its stem as from the sun and air, acquires a bright tint. So do leaves. The physiologist says it is “due to an increased absorption of oxygen.” That is the scientific account of the matter, - only a reassertion of the fact. But I am more interested in the rosy cheek than I am to know what particular diet the maiden fed on. The very forest and herbage, the pellicle of the earth, must acquire a bright color, an evidence of its ripeness, — as if the glove itself were a fruit on its stem, with ever a cheek toward the sun. (62-63, 下線は引用者)

ソローは自身もつ植物の見解と生理学者がもつ植物の見解との違いをここで表明している。生理学者が物質の展開、つまり科学的な視点から紅葉を解釈するのに対して、ソローは植物の美に関心を示している。さらに、ソローが紅葉を“when it commences a more independent and individual existence”と捉え、葉を“the rosy cheek”と比喩的に述べている点からも独自の視点で紅葉を見ているのは明らかだ。

ソローは生理学者や植物学者による自然の見方を否定しているとい概に断定できないものの、*Autumnal Tints* で自身の観察眼を生理学者の自然の見方と相違することを“*How differently the poet and the naturalist look at objects!*” (112) と述べている。ソローのこの主張を考慮すると、彼は生理学者による自然の見方に対置させて作品に植物を記述していると考えられる。ソローの自然の見方に関して、バーガーは作品を二つのグループに分けて的確な説明を行っている。バーガーは、ソローが博物学的見解と主観的見解を融合させ

た自然観察の結果を読者や講演時の聴衆に行っていると説明する。

“The Succession of Forest Trees”, *The Dispersion of Seeds*, “Huckleberries”, and “Autumnal Tints” are discourses based on extensive and organized observations drawn from Thoreau’s programmatic nature study. They are full of facts related in catalog-rhetoric fashion, by species or by dates or seasons, or both; they are more discursive than anecdotal; and they are characterized by a lyrical intensity in their descriptive passages, as if Thoreau were compensating for his emphasis on facts by intensifying his aesthetic response to, and articulation, of the visible landscape. (Berger 36)

バーガーによると、ソローの博物学に関する作品（natural history works）は二つのグループに別れるという。事実への接近もみられるが、哲学的傾向が強いとされる作品群を第一グループとして、“Walking”、“Wild Apple”、“Night and Moonlight”とする⁵⁾。そして、上述の引用にあたる第二グループは“The Succession of Forest Trees”、*The Dispersion of Seeds*、“Huckleberries”、“Autumnal Tints”である。バーガーはこのグループの特徴をソローの計画に従った広範囲に渡る有機的観察が元であり、作品が抒情的に執筆されていると指摘する。

植物の属性や開花時期などを正確に書き留めた膨大な量の観察記録が証するように、ソローは植物の正確な属性を熟知していた。また、彼は生理学者や植物学者が書き留めた植物の記録にも関心をもっていた。ソローは発売して間もない1860年1月にダーウィン（Charles Robert Darwin, 1809-1882）の *On the Origin of Species by Means of Natural Selection*（1859）を読んでおり、仲間内でダーウィンの新著と進化論が話題になることもあった（Harding 429）。それに加え、ソローがウッド（Alphonso Wood, 1810-1881）の *A Class-Book of Botany*（1846-1851）を読んでいた可能性があることも明らかにされている（Sattelmeyer 293）。ソローはウッドのこの作品にも留意したうえで、アメリカで書かれた詩に紅葉が十分に描かれていないと作品の冒頭で主張したと考えられるのではないだろうか。 *A Class-Book of*

Botany は、中高一貫校や神学校を対象に企画された作品であり⁶⁾、科学的見解から植物が記述されている。ウッドは *A Class-Book of Botany* で葉の色が変化する原因を以下のように説明する。

a. The color of the leaf is due to minute globules, or grains, called chlorophyll (green leaf) , adhering to the insides of the cells, just beneath the cuticle, and composed of carbon and hydrogen, with a small proportion of oxygen. Their change of color in autumn, is stated by Macaire to depend upon their oxidation. As the leaves in autumn absorb more oxygen by night than they evolve by day, an excess is gradually added to the chlorophyll, which changes the green first to yellow, then orange, red, and crimson successively, according to the quantity absorbed. The same effect may be produced by acids. (Wood 82)

A Class-Book of Botany では葉の色が変化する原因を葉緑体によるはたらきと見做し、炭素や水素による物質の展開が起因すると説明されている。ウッドによるこの作品から、既に 19 世紀中葉のアメリカでは葉の色が変化する原因が科学的に明らかになっていたことがわかる。このようにみていくと、ソローが作品冒頭部でアメリカの詩や文学では紅葉の十分な描かれ方がされていないと指摘したのは、*A Class-Book of Botany* のように科学的視点から植物の属性を記述した作品はあるものの、*Autumnal Tints* のように植物の正確な属性と主観を融合させ抒情的に記述された作品がないということだろう。

ペイトはソローの自然の見方について、ワーズワス (William Wordsworth, 1771-1855) との類似性を指摘したうえで、ソローがダーウィンやヘッケル (Ernst Heinrich Philipp August Haeckel, 1834-1919) とは異なる自然の見方をしていると述べる。ペイトによると、“economy of nature” と “active of human” の関係をダーウィンは光合成について補足説明したのに対して、ワーズワスは花がどのように人間の精神に活力を与えるのかを詩のなかに描いたという。そして、18 世紀の科学者は植物を文字通り “food of life” とみなし、光合成がなければ大気のなかに酸素はなく、故に人間は生きられない

と考えた。一方で、ロマン主義の詩人は植物を“food for the spirit”として見做していた (Bate 39-40)。確かに、*Autumnal Tints* から読みとれるよう、ソローにとっての自然の価値とは自然観察で感受し得られる精神的喜びだ。ソローの自然の見方は、“But of much more importance than a knowledge of the names and distinctions of color is the joy and exhilaration which these colored leaves excite.” (94) という記述からもわかる。ソローは *Autumnal Tints* を生理学や博物学といった事実に基づいた見方とは異なる視点から自然を描いた。ソローによる自然の描き方は自然から喜びを感受し得た心情や、自然の理法を人間にあてはめることであり、そうした特徴は *Autumnal Tints* にもよく表れている。

ソローが、当時における自然の一般的な見方へ疑いを抱いていたのは明らかだ。このことがわかる場面が *Autumnal Tints* にも含まれている。その場面を考察する前に、ソローが *Autumnal Tints* を題材にした講演の感想を綴った日記 (1859年2月25日) に着目する。

All the criticism which I got on my lecture on *Autumnal Tints* at Worcester on the 22d was that I assumed that my audience had not seen so much of them as they had. But after reading it I am more than ever convinced that they have not seen much of them,—that there are very few persons who do see much of nature. (Thoreau 544)

ソローは2月22日に行った講演の感想を3日後の25日の日記に書き留めているが、確かな目で自然を見る聴衆がほとんどいない状況を講演で実感したと記述している。この記述から、ソローの属する時代の人びとは自然を見ることにほとんど価値を置いていなかったと推測できる。当時の人びとのこうした姿をほのめかすかのように、*Autumnal Tints* には自然の美に価値を置かない人間が登場する。ソローは作品に自然美を等閑視する人間を象徴的に登場させ、読者や講演時の聴衆に対し、自然のもつ美しさを気付かせようとしたのではないだろうか。その顕著な例として、Purple Grasse の場面 (64-66) が挙げられる。この場面では、ソローとある人間 (“man”) の Purple Grasse に対する価値観の違いが対照的に書かれている。ソローは

小さな目立たない姿 (“It was even difficult to detect , and if you plucked a single plant, you were surprised to find how thin it was, and how lit e color it had”, 66) をした Purple Grasse が、大地を豊かにしていると感動を表す (66)。あわせて、ソローが Purple Grasse を “the walker’s harvest” (66) として捉えるところには、Purple Grasse の美しさから得られる精神的喜びにこそ価値を見出しているソローの感性がよく表れている。一方で、この場面に登場する、この植物を刈り取るある人間 (64) は、自然から精神的喜びを感受するのではなく、生活の豊かさを促進させるツールとして物質的価値を見出している。ソローは Purple Grasses をかまで刈り取る人間の姿を “the greedy mower does not deign to swing his scythe” (66) と述べる。否定的なこの見解に加え、ソローはこの人間が Purple Grasses の美しさに気付く目をもたないことを “Or, it may be, because it is so beautiful he does not know that it exists; for the same eye does not see this and timothy” (66) と述べる。ソローが Purple Grasses を刈り取る人間を登場させた意図は、当時の人びとがもつ自然に対する価値観を示唆するためであるといえよう。

続いて、*Autumnal Tints* に織り込まれた植物を鍵にしてこの作品を考えていきたい。この作品に織り込まれた植物はそれぞれがなにかしらの意味をもつと予想できるが、本論で着目する植物は *Andropogons* 属である。この植物はソローがもつ一貫した通底する思想⁷⁾ を示唆していると考えられる。ソローは *Andropogon Furcatus* (Foked Beard-Grass, or call it Purple-Fingered Grass) と *Andropogon Scoparius* (Purple Wood-Grass) をあわせて次のように述べている。

These two are prevailing grasses at this season on dry and sandy fields and hill- sides. The culms of both, not to mention their pretty flowers, reflect a purple tinge, and help to declare the ripeness of the year. Perhaps I have the more sympathy with them because they are despised by the farmer, and occupy sterile and neglected soil. (69)

この引用では、*Furcatus* と *Scoparius* の特性とこれらの植物が生息する

土地の性質が述べられている。ソローによるこの記述から、*Furcatus* と *Scoparius* が生息する土地は不毛であるとわかる⁸⁾。また、*Furcatus* と *Scoparius* の外観の特徴に関しては“not to mention their pretty flowers”に留意すべきであり、これらの植物をかわいらしいと捉えているソローの感性がわかる。しかし、*Furcatus* と *Scoparius* はかわいらしいというよりも質実な外観をしており、真っすぐに立つ姿は頑健としている。ソローにとって、*Furcatus* と *Scoparius* が特権的植物であるのは明らかで、これらの植物をその年の成熟を表す象徴(“declare the ripeness of the year”)として見做している。引用の最後の文で、ソローが農夫に軽蔑されている *Furcatus* と *Scoparius* に共感している箇所にも留意すべきだ。

ここで問題となるのは、植物の正確な知識を持つソローが *Furcatus* と *Scoparius* の特性をよく考慮したうえで、これらの植物に自身の思想を投影させて作品に織り込んだと考えられる点だ。ソローは *Walden* の“economy”で唱えたアメリカ人らしい精神、つまり質実な姿と独立した逞しい精神を饒舌に代えて、*Furcatus* と *Scoparius* を作品に織り込み表したのではないだろうか。*Furcatus* と *Scoparius* が生息する不毛な土地は、1845年7月4日にソローがウォールデン湖畔で独居生活を試みた土地の性質に結びつく。ウォールデン湖畔は、かつてゴブリン(“goblins”)が出ると噂されるような街から離れた場所にあり(Lemire 3)、解放奴隷やアイルランド移民といった社会から妨げられた人たちの生活の場であった。*Furcatus* と *Scoparius* は“wild”と“civilized garden”の両方に生息する特性をもつ(Loewer 183)が、この特性は社会(“civilized garden”)とウォールデン湖畔(“wild”)というどちらの場所でも生活できるソローの性質と相重なる。

次に着目すべきなのは、ソローが自分自身を *Furcatus* と *Scoparius* が農夫に軽蔑される立場にあることに重ね合わせている心情である。当時の社会におけるソローの評価の一例として、ホズマー(James Kendall Hosmer, 1834-1927)による私見を挙げる。

This strange man [Thoreau], rumor said, had written a book no copy of which had ever been sold.... The edition fell dead from the press, and

all the books, one thousand or more, he had collected in his mother's house, a queer library of unsold books which he used to exhibit to visitors laughing grimly over his unfortunate venture into the field of letters. [...] Thinking of the forest fire I fancied he smelled of smoke and peered curiously up the staircase behind him hoping I might catch a glimpse of that queer library all of one book duplicated many times. (Harding 222-224)

ホズマーはソローを“strange man”とみているが、こうした印象は隣人たちがソローに抱く共通のイメージであった。ソローは子どもたちや仲間内から愛され慕われていたものの、自身の道徳心や尺度に従った行動、そして自然観察に多くの時間を割り当てる姿は、世間一般の人たちに変わり者という印象を与える場面も少なくなかった。社会から必ずしも受け入れられていたわけではなかったソローは、*Furcatus* と *Scoparius* を自身の心の共感者としてみていたと考えられる。ソローが自らの思想をこれらの植物に投影させたのではないだろうかという仮説は、Purple-Fingered Grass⁹⁾ の描写 (70) に着目するとより根拠付けられる。

Wherever I walk these afternoons, the Purple-Fingered Grass also stands like a guide-board, and points my thoughts to more poetic paths than they have lately travelled. (70)

ソローは Purple-Fingered Grass を自らの思想を示す“thought”と“poetic path”のガイドボードとして定めている。関心が向けられる機会の少ないこれらの植物に、ソローは心の共感者として思いを寄せていた。このように、ソローは植物を客観的見解からみるだけではなく、その属性や理法を自分自身に重ね合わせて共感者としてみているのだ。

3. ソローが希うアメリカ精神

19世紀中葉のアメリカでは、ヨーロッパをはじめとする遠方の土地へと人びとの関心が向いていた。ソローは *Autumnal Tints* で絵画的描写の特徴を利用して自然を描き、講演時の聴衆や読者の関心が、アメリカに向かうよう意図していたのではないかと考えられる。本章では、ソローの場所の感覚に関して考察された先行研究を考慮しながら、ソローと場所の感覚について考察を巡らせていきたい。1828年にウェブスター (Noah Webster, 1758-1843) によるアメリカ英語の単語と用語に詳しい *Webster's Dictionary* が出版され、1837年にエマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-1888) が “The American Scholar” を発表した事実が示すよう、19世紀中葉はアメリカ独自の文化や思想が模索された時代であった。だが、その一方で人びとの関心や憧れがヨーロッパをはじめとする他所へ向いていた傾向がある。メットウォーリーは19世紀のアメリカでは出版や講演のテーマとして旅行話の人氣が高く、アメリカ文学史に名を残す作家たちの多くが海外旅行へと出かけていた事実を指摘している (Metwallie 68)。ソローと同時代の人びとがアメリカから離れた遠い場所に興味をもっていた事実はソローの著作からも明らかである。

ビュエルによる “The Aesthetics of the Not There” という定義がソロー研究においてよく知られているよう、ビュエルが指摘するようにソローがいまここにあるウォールデン湖畔に遠方の地がもつ美のイメージを投影してパストラル化した。

Thoreau's first recollected snapshot of pond gazing, which is also the reader's first glimpse of the pond, is thus a picture not of the thing itself but of the thing as it reminds him of a more romantically remote elsewhere. This Walden he will show us is no mere local niche. Rather, or in addition, it is a subalpine vista, or perhaps a rugged, leafy, tree-gnarled Adirondack landscape. (Buell 69-70)

ビュエルはソローが *Walden* でウォールデン湖を高い山にある湖（タルン）であるかのように仮想し、この湖が高山の雰囲気をもつと強調している点に着目している。あわせて、ソローが脱イギリス化に成功したと安易に断定できないという立場にあるマキュージックの説明にもふれておく必要がある。彼はソローがイギリスから精神的独立を希求していたと述べたうえで、ソローの “deep ecological conception of the natural world” はイギリス・ロマン主義の影響を受けていると説明している。そして、すでにこうした考えは、ソローが最初に刊行した著作にもあらわれているという (McKusick 144)。ソローがワーズワスをはじめとするイギリス・ロマン派の詩を愛読していたのは事実であり、イギリス・ロマン派から影響を受けていた可能性は十分にある。ビュエルとマキュージックの指摘は一例であり、ソロー自身がアメリカから離れた遠い土地をみていたという指摘は多く存在する。

しかし、ソローがイギリスから精神的独立を望み、アメリカの独自性を模索していたのは明らかだ。スミスは、ソローは過去やイギリスの詩と自分自身を結びつけることはせず、ソロー自身の独自性を規定するため、アメリカの文学のために独立宣言する必要があったと主張している (Smith 221-222)。ソローがイギリスから精神的独立を希求して模索していたという事実は、ソローの作品から明らかだ。ソローの作品でアメリカをイギリスと比較し、アメリカを優位付けて示されているケースは多くみられる。とりわけ、“Walking” (1861) の以下に挙げる二つの記述から明らかであろう。

The Atlantic is a Lethean stream, in our passage over which we have had an opportunity to forget the Old World and its institutions. If we do not succeed this time, there is perhaps one more chance for the race left before it arrives on the banks of Styx; and that is in the Lethe of the Pacific, which is three times as wide. (Thoreau “Walking” 608)

Where on the globe can there be found an area of equal extent with that occupied by the bulk of our States, so fertile and so rich and varied in its productions, and at the same time so habitable by the European,

as this is? (Thoreau “Walking” 609)

先に挙げた引用で着目すべきなのは、ソローは大西洋を忘却の川に喩えており、旧世界から新世界へと海を渡る過程のなかで、アメリカ人は自分たちを旧世界の制度から離脱することができると考えている点だ。言い換えれば、メイフラワー号で新大陸へ渡ってきた清教徒の航海が、ギリシア神話の世界に据え置かれた記述である。“Walking”でのこの記述はアメリカがイギリスの制度から受ける影響を断ち切ろうとする、ソローによる精神的独立宣言といえよう。次に挙げた引用では、アメリカのゆたかさを称賛している点に着目すべきだ。ソローはアメリカ(“our States”)の豊かさを最上位に位置付け、土地の広大さ、豊かな土地、豊富な収穫などを賛美している。ソローがウォールデン湖畔での生活を試みた目的は、*A Week on the Concord and Merrimack Rivers* (1849)の執筆や逃亡奴隷の援助などいくつかの理由を挙げることができるが、それらの理由に加えて、自分がいまいる場所をみつめるためであった。ソローのこうした姿勢は、町に行き隣人の生活ぶりを観察する行動や、ウォールデン湖畔近辺の自然観察によく表れている。

ソローは *Walden* の冒頭で、この作品はニューイングランドに住む人たちが対象読者であることを記述している。

I would fain say something, not so much concerning the Chinese and Sandwich Islanders as you who read these pages, who are said to live in New England; (Thoreau *Walden* 6)

ソローがこのような記述をした理由は、同時代の人びとの関心がアメリカから離れた遠い世界へと向いていたためではないかと推察できる。19世紀中葉、中国は眠れる獅子と言われるほど世界の中心であり、サンドウィッチアイランドにもまた当時の人びとの関心が惹き付けられていた。ソローはニューイングランドという自分たちで名付けた土地にいながらも、他の土地へと関心を向ける人びとに対して疑いを示す。

ソローは *Walden* の読者に対して、固定された考え方を変えることで、ア

アメリカで精神的ゆたかな生活を送れると繰り返し述べている。

Most men, even in this comparatively free country, through mere ignorance and mistake, are so occurred with the factitious cares and superfluously coarse labors of life that its finest fruits cannot be plucked by them. (Thoreau *Walden* 7)

ソローは *Walden*、とりわけ“economy”を通じて、なぜ比較的自由な国であるアメリカにしながら人生の本質と向き合う時間がないのかと読者に問いかけている。他の諸国とアメリカの違いは“economy”のところどころに記述されているが、その例をいくつか挙げる。安全性や利便性のためではなく、贅沢さのために列車に金をかけることに対して疑いを示し、これらの飾りはハーレムのご婦人や中華帝国の軟弱な国民のためにある (Thoreau *Walden* 28) という主張や、ニューイングランド人であれば自分のパンの材料をこの土地でたやすく育てることができ、遠くの市場をあてにしなくてよい (Thoreau *Walden* 47) という主張である。

Walden から *Autumnal Tints* に話題を戻すと、*Autumnal Tints* でも読者や講演時の聴衆にアメリカへと関心が向かうよう促されている。それは、アメリカに生息する植物が作品に次々と織り込まれ、それらの植物のもつ美を称賛する記述が裏付けよう。それに加え、ソローは作品で自分がいまいる身近な場所にこそ価値があると例を挙げながら主張する (114)。他に誰も知らない人がいない場所でベリー摘みに勤しむ女の子、どこに行けば自分の目で星を見られるのかをよく熟知する天文学者、地面の下からエサを探しあてる雌鳥を挙げて、それぞれが適する場所でこそ見えるものがあると説いている。そのうえで、ソローは自分の身近な場所で注意深く誠実に、植物の観察を記録したリストの作成を勧めている (114)。

以上にわたってみてきたように、ソローは *Autumnal Tints* においてヨーロッパ (イギリス) と比較したアメリカの優位性を示したうえで、写実的手法を用いて自らの近辺に生息する植物を書き記した。ソローはこの作品で読者や講演時の聴衆にアメリカのすばらしさを教え説いているのだ。

結論

ソローが生涯にわたって植物を観察し正確に記録をとってきたのは、彼の著作や日記の膨大な記述が証している。ソローが *Autumnal Tints* について、秋の植物を書き留めた“my notes”からの抜粋（63-64）と述べるように、作品には植物の正確な記録が次々に織り込まれている。しかし、ソローの身近に生息する植物が書き留められた単なる一覧表として *Autumnal Tints* を見做すのは早合点であり、この作品にはソローの様々な主張が投影されている。

ソローが読者や講演時の聴衆に *Autumnal Tints* を通して教え説いたのは、どのようなことなのかを作品の構成に従って振り返る。まず、作品の冒頭部に着目すると、アメリカの秋とイギリスの秋の違いが提示され、イギリスの秋と比較してアメリカの自然の優位性が示されている。このあとにイギリス詩人トムソンの *Autumn* から引用が挙げられるが、その意図として、当時のアメリカでこの詩がベストセラーであったという背景に加え、イギリスの秋と異なり、アメリカには色彩豊かな秋があることを示すためであると考えられる。ソローはアメリカの自然はイギリスの自然よりも美しいかどうかを本質的問題として取り上げているのではない。つまり、この作品に織り込まれた植物群は人びとの関心がアメリカに向かうよう促すために用いられた一つの手法なのだ。そして、アメリカに生息する植物が作品に次々と織り込まれていることに着目すると、それらの植物群は正確な属性と外観の描写にあわせて、ソローの主観的な思想が融合された象徴としてのはたらきをもっていることがわかる。作品の結びでは、自分の近辺でこそ見えるものがあるのだと、ベリー摘みに勤しむ女の子、天文学者、雌鶏を例に挙げて述べている。それぞれの適した場所でこそ見えるものがあるというソローの主張はまさに *Autumnal Tints* の主題であり、ヨーロッパや他の土地に関心を向ける同時代の人たちに対して、自分が根をおろすアメリカに目を向けることでこそ見えるものがあると教え説いていると考えられる。

以上の検証の結果、*Autumnal Tints* が単なる植物の一覧表ではなく、ソローが読者や講演時の聴衆の関心がアメリカに向かうよう促している点もまた、この作品のねらいであり着目すべき点だといえるだろう。

*本論文は 2017 年度に修士論文として白百合女子大学に提出した学位論文をもとに、必要箇所を改訂し執筆している。

註

- 1) 本稿における *Autumnal Tints* の引用はすべて Henry David Thoreau, *October*, OR *Autumnal Tints* (New York・London: W. W. Norton & Company, 2012) により、本文中には頁数のみを記す。
- 2) ソローは *Autumnal Tints* の執筆動機を次のように述べている。“I formerly thought that it would be worth the while to get a specimen leaf from each changing tree, shrub, and herbaceous plant, when it had acquired its brightest characteristic color, in its transition from the green to the brown state, outline it, and copy its color exactly, with paint, in a book, which should be entitled, *October*, or *Autumnal Tints*. [...] I have made but little progress toward such a book, but I have endeavored, instead, to describe all these bright tints in the order in which they present themselves. The following are some extracts from my notes.” (63-64)
- 3) スコットランド出身の詩人。1725 年にロンドンに出て、*The Seasons* を完成させた。
- 4) 本稿における *The Seasons* の引用はすべて、James Thomson, *The Seasons* (New York: Oxford University, 1981) により、本文中には頁数のみを記す。
- 5) バーガーは第一グループに関して、次のように説明している。“Distinguished from this first group are essays like “Walking”, “Wild Apples”, and “Night and Moonlight”, which share some traits of the first group, but which are more independent works, philosophical tangents, as it were, of the circle of interrelated works which Thoreau was building into an encyclopedic account of Concord’s economy of nature. These less empirical essays are still organized discursively rather than excursively, but there is a looser approach to facts and the theses are more philosophical than science.” (Berger 36)

- 6) *A Class-Book of Botany* のタイトルページには “Designed for Colleges Academies, and Other Seminaries” という記述がある。この記述から、*A Class-Book of Botany* は中高一貫校や神学校向けで、科学的な専門書というよりは理科の授業などで用いられたクラス・ブックであると考えられる。
- 7) ソローはイギリスから強い影響を受けているアメリカ社会から逃れたいという思いで、アメリカの独立記念日にあたる 1845 年 7 月 4 日にウォールデン湖畔での生活を始めた。アメリカがイギリス流の発展へと近づいている状況を危惧するソローの心境が *Walden* の “economy” におけるところどころから読みとれる。ソローは “economy” で人間に必要な衣食住をどこまで切り詰められるかを様々な角度からの検証によって示している。ソローはシンプルな暮らしを営むことで、イギリスのような苛酷な労働条件の工場で働く貧民が現れることも、負債に追われ過剰な労働に追われる必要もないと考えている。
- 8) ルミールはウォールデン湖畔の土地の性質について次のように説明する。 “Walden Woods was one of those sites. The first European settlers had given up attempts to till what Henry David Thoreau calls Walden’s “sterile” soil, leaving the area forested as a source of fuel and timber. The swampy edge of the town’s Great Field, no longer the centerpiece of the town’s agricultural system, was another similarly infertile place.” (Lemire 10)
- 9) ソローは *Autumnal Tints* で Purple-Fingered Grass と述べているが、この植物もまた *Andropogon Furcatus*, Foked Beard-Grass, or call it Purple-Fingered Grass であると考えられる。本文では作品に記されているとおり Purple-Fingered Grass と記す。

引用文献

Bate Jonathan. *Romantic Ecology*. Routledge, 2013.

Berger, Michael B. *Thoreau’s Late Career and The “Dispersion of Seeds.”* Camden House, 2000.

Buell, Lawrence. *The Environmental Imagination: Thoreau, Nature Writing,*

- and the Formation of American Culture*. Harvard University Press, 1996.
- Dillman, Richard. *The Essays of Henry David Thoreau*. Rowman & Littlefield, 1992.
- Jung, Sandro. *James Thomson's The Seasons, Print Culture, and Visual Interpretation, 1730-1842*. Lehigh University Press, 2015.
- Lemire, Elise. *Black Walden Slavery and Its Aftermath in Concord, Massachusetts*. University of Pennsylvania Press, 2009.
- McKusick, James C. *Green Writing: Romanticism and Ecology*. Palgrave Macmillan, 2010.
- Metwallie, Ahmed M. "American Abroad: The Popular Art of Travel Writing in the Century Nineteenth." *America: Exploration and Travel*, Bowling Green State University Popular Press, 1979, pp. 68-81.
- Sattelmeyer, Robert. *Thoreau's Reading: A Study in Intellectual History with Bibliographical Catalogue*. Princeton University Press, 2014.
- Schneider, Richard J. *Henry David Thoreau*. Twayne Publishers, 1987.
- Smith, Lorrie. "'Walking" from England to America: Re-Viewing Thoreau's Romanticism." *The New England Quarterly*, Vol. 58, June 1985, pp. 221-241.
- Stevenson, Louise L. "The Transatlantic Travels of James Thomson's *The Seasons* and its Baggage of Material Culture, 1730-1870." *American Antiquarian Society*, 2006.
- Thomson, James. *James Thomson The Seasons*. Oxford University Press, 1981.
- Thoreau, Henry David. *October, or Autumnal Tints*. W.W. Norton & Company, 2012.
- . *Walden and Other Writings of Henry David Thoreau*. The Modern Library, 1950.
- . *Walden, Civil Disobedience, and Other Writings*, W. W. Norton & Company, Inc. 2008.
- . *The Journal of Henry David Thoreau, 1837-1861*. New York Review Books

Classics, 2009.

Wood, Alphonso. *A Class-Book of Botany*. Crocker & Brewster, 1846.

Alexandria Gazette 03 Jul. 1858: 2. PDF. (<https://is.gd/i1bYY2> 閲覧日: 8月27日)

Boon's Lick Times 11 Nov. 1843: 2. PDF. (<https://is.gd/cDIrfH> 閲覧日: 2018年8月27日)